

春秋座 能と狂言

春秋座

渡邊守章記念

狂言 — 宗論
能 — 二人靜立出之一声

京都芸術劇場 春秋座

(京都芸術大学内)

主催..京都芸術大学 舞台芸術研究センター
協力..鍊仙会、万作の会

二〇一五年一月八日〔土〕十四時開演

ブレトーグ〈演出をめぐって〉



アンケートへのご協力のお願い

この度は「春秋座—能と狂言」にご来場いただき、誠にありがとうございます。
本公演では、Webでのアンケートをおこなっております。ご回答いただいた内容は、今後の企画の参考とさせていただきます。左のQRコードを読み取り、アンケートへのご回答をお願いいたします。※回答期限 2月17日(月) 17時まで

次回「春秋座 - 能と狂言」
2026年2月7日(土) 開催予定!

宗教問答と静の造形——『宗論』と『一人静』——

『宗論』は、都への道中で行き合い、同じ宿に泊まつた二人の僧がくり広げる滑稽な結末をとおして、当時の浄土宗と日蓮宗の宗派意識を諷刺した、いかにも狂言らしい作品です。この狂言は、作られた時代の社会に加え、「七十一番職人歌合」や天正七年（一五七九）に行われた「安土宗論」などが伝える浄土と法華の二宗を念頭においたものと思われますが、二人はたがいに自派の優越を誇示して譲りません。

片山 九郎右衛門（観世流シテ方）
天野 文雄（大阪大学名誉教授）

狂言 宗論 シテ 浄土僧 野村 万作
シテ 法華僧 野村 萬斎 アド 宿屋 野村 裕基

（休憩約15分）

ツレ 菜摘女 観世 淳夫

前シテ 里女

後シテ 静御前 観世 鍊之丞

能 一人静 ワキ 勝手宮神主 宝生 常三

大鼓 亀井 広忠
小鼓 大倉 源次郎

笛 竹市 学

立出之一声

安藤 貴康

浅井 風矢
梅田 嘉宏

片山 伸吾

味方 玄

甲斐の身延

山梨県の身延山にある日蓮宗總本山久遠寺をさす。

鶴澤 光

橋本 忠樹
分林 道治

片山 九郎右衛門
浦田 保親

長野市にある天台淨土兼宗の寺。

能

一人静

ワキ

勝手宮神主 宝生 常三

大鼓 亀井 広忠
小鼓 大倉 源次郎

笛 竹市 学

立出之一声

狂言——宗論

あらすじ

身延山から帰る途中の法華僧と、善光寺帰りの浄土僧が道連れになるが、互いに犬猿の仲の宗派と知り、自分の宗旨に改宗せよと言ひ争う。嫌気がさした法華僧は口実を設けて別れようとするが、浄土僧はしつこくついて来る。たまらなくなつた法華僧が宿に逃げ込むと、浄土僧も追つて入り、今度は宗論（教義問答）を始める。一人は次第にむきになつて…。

中世の宗教対立を背景に争う、浄土僧と法華僧の、柔と剛の対照的な表現が見どころの名作です。

泥沼化する争いの果ての結末は？二人の掛け合いの妙をお楽しみ下さい。

万作のことば『狂言を生きる』

相対する二つの役の対立がはつきりと描かれているばかりでなく、内容的にも芸の上でも競い合えるということが『宗論』が名作といわれる所以と言えるでしょう。

浄土僧は柔らかく、法華僧は強く演じます。テーマをはつきりと出している次第を法華僧が強吟、浄土僧が弱吟で謡うところから始まつて、名宣、道行、その後もずっと、その対照がはつきりしているのです。

それに加えて、浄土僧は少し意地悪く、法華僧は直情型という二つの性格を出す芸を見せることがあります。

そういう面でもよくできている曲です。演者の側から見ると、すぐに向かつ腹を立てる法華僧の方がどちらかというと演じやすく、浄土僧の方は、その上を行く芸境が要求されるよう思います。

〔中略〕

私は最近、浄土をやることが多くなつていますが、今もし私が法華をやるとしたら、強さ一辺倒にはやりません。若いころのような強いかつちりとした法華をやることを避ける年齢になつていますから、自分なりに構築して役作りをします。單純に強さを表すだけではないのです。強さの中にも柔らかさがあり、柔らかい中にも強さがあるはずです。

語句解説

- 南無妙法蓮華經。れんげ經のきょうの字を狂うせんと人や思ふらん
アドの次第。「狂うせんと」は「熱狂的だと」の意。
- 甲斐の身延
山梨県の身延山にある日蓮宗總本山久遠寺をさす。
- 南無阿弥陀仏の六の字を難かしと人や思ふらん
シテの次第。「難かしと」は「やつかいだめんどうだと」の意。
- 信濃の国善光寺
長野市にある天台淨土兼宗の寺。
- ぐわん〔願〕――
かねてよりの願い。
- かたへんど〔片辺土〕――
片いなか。
- じようごわもの〔精強者〕――
強情な人。
- あみみれたみ〔編み連れた身〕――
離れられない間柄。
- ほうもん〔法問〕――
教義問答。
- しゅうろん〔宗論〕――
宗派間の論争・法論。
- 五十展転隨喜の功徳――
「法華經」を一人から五十人まで展転相伝した後、これを聞いて、その善根功徳に対し心から喜んだ人までも、その受ける功徳は莫大である、という意味。
- 一念弥陀仏則滅無量罪――
一心に阿弥陀仏を信ずれば、ただちに無限の罪も消える、という意味。
- ずいき〔芋苗〕――
いもがら。「随喜」と掛け詞になつている。
- おんでもない事――
言うまでもない事。
- むりようのさい〔無量の菜〕――
食べきれない程の沢山の料理。「無量の罪」の掛け詞。
- ことたろうたおかた〔事足ろうたお方〕――
富裕な人。
- おとき〔お齋〕――
仏家で午前中による食事。午後は食しないと戒律で定めている。
- うざいがき〔得罪餓鬼〕――
膿血や残飯を食べる餓鬼。
- 非学者論議に負けず――
諺。無学な者は横車を押して論議に屈せぬ意。
- ねぼつけ〔寝法華〕――
「寝仏者」に対する法華僧の言葉。
- じんじょう〔晨朝〕――
明け方の、念佛や読経などの勤行。

能——二人静 立出之一声

3

3 菜摘女と女(静の靈)の問答

女 これこれ、そこの人に言いたいことがあります。

菜摘の女 どなたでしようか。

女 神社にお帰りになるのでしたら、言付けたいことがあります。

1【名ノリ笛】

〈名ノリ〉

ワキ「これは和州三吉野、勝手の御前の社人にて候、さても毎年正月七日に、若菜を神供に供へ申し候、当年はそれがしが番に当りて候ふほどに、女どもに申し付け、菜摘川に遣わさばやと存じ候」

〈問答〉

ワキ「いかに女、菜摘川のほとりに出で、若菜を摘み、どうとう帰り候へ

ツレ「心得申し候」

〈一聲〉

ツレ「見わたせば、松の葉白き吉野山、幾代積もりし、雪ならん」

〈サシ〉

ツレ「深山には松の雪だに消えなく、都は野辺の若菜摘む、頃にも今やなりぬらん、思ひやることゆかしけれ」

〈上ヶ歌〉

ツレ「木の芽春雨降るとても、木の芽春雨降るとも、なほ消えがたきこの野辺の、雪の下なる若葉をば、いま幾日ありて摘ましまし、春立つといふばかりにやみ吉野の、山もかすみて白雪の、消えし跡こそ道となれ、消えし跡こそ道となれ」

ツレ「いかに女、菜摘川のほとりに出で、若菜を摘んで、は

を摘み、どうとう帰り候へ

ツレ「心得申し候」

ツレ「なにごとにて候ふぞ

〈セイ〉

ツレ「見わたせば、松の葉白き吉野山、幾代積もりし、雪ならん」

〈サシ〉

ツレ「深山には松の雪だに消えなく、都は野辺の若菜摘む、頃にも今やなりぬらん、思ひやることゆかしけれ」

〈上ヶ歌〉

ツレ「木の芽春雨降るとても、木の芽春雨降るとも、なほ消えがたきこの野辺の、雪の下なる若葉をば、いま幾日ありて摘ましまし、春立つといふばかりにやみ吉野の、山もかすみて白雪の、消えし跡こそ道となれ、消えし跡こそ道となれ」

ツレ「いかに女、菜摘川のほとりに出で、若菜を摘んで、は

を摘み、どうとう帰り候へ

ツレ「心得申し候」

ツレ「なにごとにて候ふぞ

〈問答〉

ワキ「ただ今の言葉の末にて聞き知りて候、さては静の立ち寄り給ひたるか、静にてまし

1 勝手明神の神職の登場

神職

吉野勝手明神の神職です。当社では毎年の正月七日に若菜を神前に供えていまが、今年はわたくしが当番になつたので、女たちに言いつけ、菜摘川に行くよう伝えたと思ひます。

菜摘川のほとりに行つて、若菜を摘んで、はやく帰つてくるように。

菜摘の女 承知しました。

ツレ「まづまづこのよし仰せ候ひ、もしも申すべきぞ

ツレ「あら恐ろしのことを仰せ候ふや、言伝てをば申すべし、さりながらおん名をば誰と申すべきぞ

ツレ「まづまづこのよし仰せ候ひ、もしも申すべきぞ

2 菜摘女の叙景

菜摘の女

あたりを見渡すと、吉野山は松の葉も白くなつて、幾代にわたつて積つた雪なのだろう。

この深い山では松の枝に雪が消えずに残つてゐるというのに、都では野辺の若菜を摘むころだろう、そう思つただけでも都のようですがしのばれます。

木の芽も顔をだすという春ですが、この野辺では雪はまだ消えそくもない。その雪の下にある若葉は、あと何日のあとに摘んだらよいのでしょうか。春が来たとは名ばかりだけれど、み吉野は山も霞んで白雪が融けたあとに、いったんは見えなくなつていた雪の下の道が見えてくるのだ。

地へ夕風まよふあだ雲の、憂き水茎の筆の跡、かき消すやうに失せにけり、かき消すやうに失せにけり

よく届け給へと

シテ「まづまづこのよし仰せ候ひ、もしも申すべきぞ

シテ「あら恐ろしのことを仰せ候ふや、言伝てをば申すべし、さりながらおん名をば誰と申すべきぞ

シテ「まづまづこのよし仰せ候ひ、もしも申すべきぞ

シテ「まづまづこのよし仰せ候ひ、もしも申るべきぞ

3 菜摘女と女(静の靈)の問答

シテ「み吉野にては社家の人、そのほかの人々にも言伝て申し候、あまりにわらはが罪業のほど悲しく候へば、一日経書いてわが跡印ひたび給へと、よくよく仰せ候へ

シテ「み吉野へおん帰り候はば言伝て申し候はん

ツレ「なにごとにて候ふぞ

ツレ「いかなる人にて候ふぞ

シテ「み吉野にては社家の人、そのほかの人々にも言伝て申し候、あまりにわらはが罪業のほど悲しく候へば、一日経書いてわが跡印ひたび給へと、よくよく仰せ候へ

シテ「み吉野へおん帰り候はば言伝て申し候はん

ツレ「かかる恐ろしきこと候はね、急ぎ

4 菜摘の女と神職の問答

菜摘の女

このよう恐ろしいことはあります。すぐに帰つて、このことを伝えようと思います。申しあげます。ただいま帰りました。

神職 どうして遅くなつたのか。

菜摘の女 不思議なことがあって、遅くなりました。

神職 何事ですか。

菜摘の女 菜摘川のほとりに、どこからと

まさば、舞を舞ふて御見せ候へ

八
ノ
ク
ヤ

地じへさるほどに、しだいしだいに道せばき、
おん身みとなりてこの山に、分け入り給ふ頃は
春、所は三吉野の、花に宿借かしゆうる下臥したぶしも、のど
かならざる夜嵐よあらしに、寝もせぬ夢と花も散り、
まことに一榮一落いちえいいちらくま目のあたりなる憂き世よと

て、またこの山を落ちて行く
シテ、ツレぱへ昔淨見原の天皇きよみばらてんのう
るような世の中だと思いながらも、この山
を落ちていつたのです。

シテ、ツレ静御前、しづやしづ、賤せんの苧環むすめ、繰り返し
地じ、昔むかしを今いまに、なすよしもがな静御前

御前で白拍子舞を再現的に舞う

地へ大友の皇子に襲はれて、かの山に踏み迷ひ、雪の木蔭を、頼み給ひける桜木の宮、神行の宮滝、西河の滝、われこそ落ち行け、落ち

ても波は返るなり、さるにても三吉野の、頼
む木蔭の花の雪、雨もたまらぬ奥山の、音騒おと
の滝などでしたが、その水が落ちるようにな
たしたちは落ちて行つたのです。滝の水は落

がしき春の夜の、月はおぼろにて、なほ足引
きの山深み、分け迷ひ行く有様は
シテ、ツレもうこしヘ唐土さとくの、祚国さざんげつは花に身を捨てて
地いづ遊子残月ざんげつに行きしも、今身の上うへに白雪しらゆき
の、花を踏んでは同じく惜しむ少年の、春の
夜も静かならで、騒がしきみ吉野の、山風に
散る花までも、追手おいての声やらんと、後をのみ
三吉野の奥深く急ぐ山路かな

した。それはさながら、朗詠に「花を踏んで
は、同じく惜しむ少年の春」と謡われてゐる
ようなようすでした。そのように春の夜も
騒がしいみ吉野は、山風に散る花まで、追手
の声であろうかと、後ろばかり見て、山路を
さらに奥深く行くのでした。

106 漢書

7

〈歌〉

地ぢへそれのみならず憂かりしは、頼朝よりともに召めしし出だされ、静しづかは舞まいの上う手てなり、はやとくと
かえ かえ

7 静の舞

7

〈歌〉

地よりともへそれのみならず憂かりしは、頼朝に召
し出しづかだされ、静は舞の上手なり、はやとくと
くとありしかば、心も解けぬ舞の袖、返かえす返かえ

7 静の舞

詞章・現代語訳についてのメモ

- 1 「」は登場楽、「」はフシの名称、「」は舞事などを示し、「問答」「上ゲ歌」「クセ」「掛ケ合い」などはフシの名称を示します。

2 「は拍子がないコトバで、劇を進行させるもの、「」は拍子に合うフシのことで、人物の感情などが述べられます。

3 「地」は合唱（地謡）の担当する謡ですが、「地」には、シテあるいはツレのセリフ、ワキのセリフ、そのどちらでもない叙景とか作者の言葉などがあります。シテやワキのセリフなどの場合はそれがだれのセリフかはすぐ分かりますが、三つめの「地」は途中からそうなることもあります。本曲の場合は、第3段の末が戸書き的なところで、一カ所です。その訳は二字下ゲです。

4 左肩の小字は掛詞です。下段の口語訳もなるべくそれをふまえるようにしています。このほかにも能には、縁語・序詞・和歌・漢詩・故事の引用があり、象徴劇としての能を構成していますが、それらは記していません。

5 「二人静」は「憑き物」の能です。本曲では菜摘女に静の靈が憑くのですが、その表現のしかたは二つあります。一つは、文字どおり菜摘女に靈が憑くもので、第4段、第5段のシテだけのところがその部分です。もう一つは、菜摘女とは別に、憑いた静の靈が同装で登場して、二人で憑依を表現するもので、「シテ、ツレ」とした6～8の文句の部分です。この演出は本曲にしかない趣向です。

下段は上段の原文にあわせた口語訳です。

二人静立出之二声を観るためこ

今回は「演出」をめぐつて考えてみた、と思います。

「口は『シバ』など、一考するに思ひます。

元章は観世流のほとんどの能の詞章や演出に改訂を加えたことで知られています。元章没後には詞章はほぼ元に戻つたのですが、演出は継承されました。本日の『二人静 立出之

—通常の「二人静」はどのように演じられるのですか。

はじめると、静の靈が同装で登場して、クセ

——人の舞いがピッタリ合うわけですか。

宝生九郎もそう考えた役者で、明治の中頃に宝生流は能では演じない曲にしました。

「それで、七草は「立出之一旨」いう所演出を考えた。その場合はどうなるのですか。

登場した静の靈は、クセから序ノ舞までの場面を橋掛りに腰掛けて見ていて、いつしょには

用心が普分なかへなかへじまひます。この時和の復讐たれど、この口開き

菜摘女に静の靈が憑く場合、菜摘女の姿に憑けばよいわけで、事実、菜摘女が静の衣装を着るまではそういう形です。それが、その時から同装の靈が登場する点に、この能の新しさがある。

主な出演者

野村 万作

のむら まんざく

和泉流狂言方。一九三一年生まれ。重要無形文化財保持者(人間国宝)。文化功労者。日本芸術院会員。祖父故六世野村萬齋及び父故六世野村万蔵に師事。早稲田大学文学部卒業。『万作の会』主宰。狂言の秘曲である『釣狐』の演技で芸術祭大賞を受賞した他、紀伊國屋演劇賞、日本芸術院賞、紫綬褒章、坪内逍遙大賞、朝日賞、旭日小綬賞、中日文化賞、ジャパン・ソサイエティ賞等多くの受賞歴を持つ。国内外で狂言普及に貢献し、ハワイ大、ワシントン大では客員教授を務める。古典はもとより新しい試みにもしばしば取り組み、代表作に『月に憑かれたビエロ』『子午線の祀り』『秋江』『法螺侍』等がある。近年では『櫛山節考』の再演に取り組み、大きな成果を挙げている。

二〇二三年度文化勲章受章。

野村 萬齋

のむら まんさい

和泉流狂言方。一九六六年生まれ。祖父故六世野村万蔵及び父野村万作に師事。重要無形文化財総合指定者。国内外の狂言能公演はもとより、現代劇や映画の主演、古典の技法を駆使した作品の演出など幅広く活躍。芸術祭新人賞・優秀賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞、千田是也賞、読売演劇大賞最優秀作品賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞等を受賞。石川県立音楽堂邦楽監督。公益社団法人全国公立文化施設協会会長。

野村 裕基

のむら ゆうき

和泉流狂言方。一九六六年生まれ。祖父故六世野村万蔵及び父野村万作に師事。重要無形文化財総合指定者。国内外の狂言能公演はもとより、現代劇や映画の主演、古典の技法を駆使した作品の演出など幅広く活躍。芸術祭新人賞・優秀賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞、千田是也賞、読売演劇大賞最優秀作品賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞等を受賞。石川県立音楽堂邦楽監督。公益社団法人全国公立文化施設協会会長。

九世 観世 鍊之丞

かんぜ てつのじょう

宝生 常三

ほうしょう つねぞう

シテ方観世流。一九五六年生まれ。本名、暁夫(あけお)。八世観世鍊之丞(人間国宝)の長男。伯父観世寿夫、および父に師事する。四才で初舞台。六四年『岩船』で初シテ。力強さと繊細さを兼ね備えた謡と演技には定評がある。東京および京都、大阪でも活躍するほか、海外公演にも多く参加。日本芸術院賞、紫綬褒章受賞。重要無形文化財総合指定保持者。公益社団法人鍊仙会理事長。公益社団法人能楽協会理事長。

十世 片山 九郎右衛門

かたやま くろうえもん

宝生流ワキ方。父、森茂好および伯父・宝生弥一に師事。一九六三年『巨船』のワキで初舞台。一九七八年『道成寺』、翌年『張良』を披く。芸術選奨文部大臣新人賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。下掛宝生会に所属。日本能楽会会員。二〇二三年、宝生新の弟の名(常三)を名のり、森常好より改名。

觀世 淳夫

かんぜ あつお

シテ方観世流。一九六四年九世片山九郎右衛門(幽雪、人間国宝)の長男として生まれる。祖母は京舞井上流四世家元井上八千代、姉は五世家元井上八千代。幼少より父に師事し、長じて故八世観世鍊之丞に教えを受ける。父とともに片山定期能楽会を主宰。全国各地で多数の公演に出演するほか、ヨーロッパ、アメリカなど海外公演にも積極的に参加している。各地での新能ホール能など能楽堂以外での公演も制作、プロデュースする。また、学校へ出向いての能楽教室の開催、能の絵本の制作、映像を駆使した舞台の制作、能舞台のCG化など、若年層のための能楽の普及活動も手掛ける。京都府文化賞奨励賞、京都市芸術新人賞、日本伝統文化振興財團賞、文化庁芸術新人賞、京都府文化功労賞、芸術選奨新人賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。重要無形文化財総合指定保持者。

笛方藤田流。一九七二年生まれ。一九八三年藤田流宗家に入門。一九八四年初舞台。一九九六年国立能楽堂三役養成事業、三期生卒業。『猿々乱』『獅子』『翁』『道成寺』『清経』『音取』『卒都婆小町』を披く。二ヨーヨーク9·11追悼公演。ギリシャ・アテネフェスティバルほか海外公演に多数参加。芸術創造賞、名古屋市芸術奨励賞受賞。

竹市 学

たけいち まなぶ

笛方藤田流十六世宗家。一九五七年生まれ。重要無形文化財保持者(人間国宝)認定。十五世宗家大倉長十郎の次男。父に師事。田中佐太郎。父及び八世觀世鍊之丞(人間国宝)に師事。六歳の時『羽衣』で初舞台。一九八二年『合浦』で初能。ビグター伝統文化振興財団賞奨励賞、日本伝統文化奨励賞、第43回伝統文化ボーラ賞優秀賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。国立能楽堂および国立劇場養成研修所講師。重要無形文化財総合指定保持者。学習院大学能楽賞受賞。公益社団法人能楽協会副理事長。

大倉 源次郎

おおくら げんじろう

笛方葛野流十五世家元。一九七四年生まれ。龜井忠雄(人間国宝)、葛野流十四世家元(の長男。母は歌舞伎囃子方田中流十二世家元田中佐太郎。父及び八世觀世鍊之丞(人間国宝)に師事。六歳の時『羽衣』で初舞台。一九八二年『合浦』で初能。ビグター伝統文化振興財団賞奨励賞、日本伝統文化奨励賞、第43回伝統文化ボーラ賞優秀賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。国立能楽堂および国立劇場養成研修所講師。重要無形文化財総合指定保持者。学習院大学能楽賞受賞。公益社団法人能楽協会副理事長。

亀井 広忠

かめい ひろただ

笛方葛野流十六世宗家。一九五七年生まれ。龜井忠雄(人間国宝)、葛野流十四世家元(の長男。母は歌舞伎囃子方田中流十二世家元田中佐太郎。父及び八世觀世鍊之丞(人間国宝)に師事。六歳の時『羽衣』で初舞台。一九八二年『合浦』で初能。ビグター伝統文化振興財団賞奨励賞、日本伝統文化奨励賞、第43回伝統文化ボーラ賞優秀賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。国立能楽堂および国立劇場養成研修所講師。重要無形文化財総合指定保持者。学習院大学能楽賞受賞。公益社団法人能楽協会副理事長。

〈トーク出演〉

【詞章整理・現代語訳・解説】

天野 文雄

あまの ふみお

一九四六年、東京都生まれ。大阪大学名誉教授。京都芸術大学舞台芸術研究センター前所長。著書に、「翁猿楽研究」(観世寿夫記念法政大学能楽賞)、「能に憑かれた権力者」(秀吉能楽愛好記)、「現代能楽講義」(世阿弥がいた場所—能大成期の能と能役者をめぐる環境)、(日本演劇学会河竹賞)、「能苑遺稿(上中下)」、「能楽名作選(上下)」、「能楽手帖」、共編著に「能を読む」(全四巻)などがある。

「春秋座—能と狂言」シリーズは、二〇〇九年度にフランス文学者・演出家渡邊守章当センター所長(当時)の企画・監修により始まりました。今回で16回目を数えます。

空間と演出で紡ぐ——春秋座の『一人静』



二〇〇九年度に渡邊守章氏（当時・舞台芸術研究センター所長）の企画・監修により始まった「春秋座—能と狂言」。この公演の面白さのひとつにセリやスッポン、照明装置がある歌舞伎劇場で、花道を橋掛に見立てて上演するということがあります。通常の能で花道やスッポンの使用や舞台照明の演出がないため、「春秋座—能と狂言」は事前の打ち合わせが必要。そこで今回は、演出とシテ方をつとめられる観世鍊之丞さんと舞台監督の小坂部恵次さん、照明デザインの藤原康弘さんによる打ち合わせの現場をのぞかせていただきました。左のQRコード、もしくは劇場Webサイトから全文をご覧いただけます。

全文はこちら

